

### 自由論題 3 東アジアの食料・農業・土地 報告 1

朴敬玉（日本学術振興会外国人特別研究員）

#### 「近代間島地域における食料流通について」

中朝国境地帯である間島地域の農業は 1909 年の日本領事館開設及び 1910 年の韓国併合を境として、進展しはじめ、それが第 1 次世界大戦を経て、1925 年の旧天図軽便鉄道の開通により、急激な商品市場化を辿り、貨幣の農家及び農村進入を促進させ、既存の農村家内手工業の崩壊をもたらした。

朝鮮人移民の移住初期において、粟は一番重要な栽培作物であったが、農業経済商品化の進展に伴い、大豆の生産は重要な役割を占めるようになった。また、第 1 次世界大戦以降は、米の生産も注目され、水田面積は次第に増加することとなる。間島地域における農作物の流過程において、朝鮮北部の商人は重要な役割を果たし、それは糧棧を媒介に農作物が流通された東北の他の地域と比べると、大きな違いでもあった。

近代における間島地域は朝鮮人の抗日運動の拠点として、そこにおける教育・朝鮮人移民組織問題はしばしば議論されてきた。ただし、畑作を主とする農業構造の変動や食料の流通における地域的特徴といった問題については深く議論されてこなかった。民国期から満洲国期まで、間島地域における農業構造の変遷過程及び食料の流通に対する分析は、東北農村社会のなかで、間島地域をどのように位置づけるべきか明らかにするうえで、必要不可欠な作業である。

そこで、本報告では間島への朝鮮人移民の移住過程を概観し、間島における畑作農業を主とする農業構造が、満洲国期にはどのように変化していくのか分析する。そのうえで、食料流通の実態を明らかにし、日本の対外政策の一端と間島地域の特殊性を浮き彫りにする。